書評

竹村義一氏著『土佐日記の地理的研究——土佐国篇——』

木村正中

『土佐日記』の地理について、竹村義一氏が長年取り組んでこられた研究の成果を一冊の本にまとめられたのが、『土佐日記の地理的研究——土佐国篇——』である。これまでに本誌『甲南国文』をはじめ雑誌・紀要などに発表されてきた数々の論稿を土台とし、それに追加修訂をして、全面的に整理されたものである。まことに特殊な研究であるけれども、それだけにまた『土佐日記』研究史上きわめて重要な意義をもつといわなければならない。本書は二部に分かれ、第一部には「国府」「大津」「大湊」「宇多の松原」「奈半」「室津」など、合わせて九章が含まれ、『土佐日記』の旅のうち、土佐の国府から室戸岬に至るまでの間で、さまざまな疑問のある地名や土地を、氏はその旅程に副って取り上げ、問題点を明らかにして、行き届いた検討を加えておられる。本書の根幹をなすのがこの第一部である。第二部は付随的な論集で、「やぎのやすのり考」「『くにのさかひのうちはとて』の『くに』は『国』か『郡』か」「はね・ならしづ考」「土佐の国号」「土佐への道」「紀氏旧跡」「土佐日記と土佐方言」「『土佐日記地理弁』刊行次第」「古地図に見える土佐の港」の九章から成る。さらに付録「土佐出身土佐日記研究者小伝」「土佐日記の地理関係研究年表」「土佐日記関係町村名変遷表」からもたいへん便益を与えられる。

さて、第一部第一章「国府」では『和名抄』『長宗我部地検帳』その他の関係資料を通して、国府の跡を正確に捉えようとされている。とくに、『地検帳』長岡郡廿枝郷に見られるホノギ名、すなわち小字に当たるぐらいの面積の田地など土地の区画を表わす地名の中に、「タイリ」「コウノキト」「符中」「コクシャウノ前」というのがあり、それぞれ「内裏」「国府の城戸」「府中」「国庁の前」であって、現存の公簿でも「ダイリ」「ニワノキド」「フチウ」「コクチャウノマヘ」となっていて、その土地の具体的な対応を高村晴義氏の『高知県長岡郡国府村誌』などによりながら探索し、これらの

ホノギのある廿枝郷「比江の地に国府――国庁が存在したことは疑いない」と述べておられる点が、本章の最も重要なところであろう。なお谷秦山の『土佐遺語』（一七〇八ごろ成立）・安養寺禾麿の『土佐幽考』（一七三四）に見られる国府跡の記述や、「紀子旧跡碑」を建てた尾池春水の『紀氏旧蹟記』（一七八五）を紹介、また直接『土佐日記』と関係はないが、秦山・禾麿が国府跡の礎石として見たと記録する石が、岡本健児氏『高知県の考古学』を読むと、比江廃寺の塔の心礎と寸法がほとんど一致し、同一物らしいことがかわるといった興味深い事実も記されている。

第二章「大津」。この章では、貫之一行が乗船した「舟に乗るべきところ」とは、次に「大津より浦戸をさして漕ぎ出づ」とあるので、大津郷すなわちだいたい後の大津村であることがわかるが、大津というだけでは乗船地点がはっきりしないところから問題になっている、その場所の推定について論じておられる。鹿持雅澄の『土佐日記地理弁』（一八五七）以来の船戸説に対して、浜田春水氏の「大津考」「大津考余滴」が新たに関を候補地とした。両地の地形や立地的様相、および貫之一行が大津を出て間もなく別れの宴を催した鹿児の崎との距離が、船戸では近すぎるという浜田説の根拠を、竹村氏はそれなりに認め、一方現在までの土地の隆起を約二メートルと仮定、はるかに内陸まで入り込んでいた当時の浦戸湾の汀線を、島田豊寿氏の「高知平野に於ける先史時代海岸汀線の研究」によって考察され、ほぼ水深ゼロになる関の可能性は辛うじてあるものの、やはり難点が残るとして、どちらとも早急に決定されていない。

次の「大湊」は、港の痕跡もなくなり、その名前さえ残っていないので、浦戸から東方海岸芸西村和食までかなりの範囲にその場所が想定されていて、西から浦戸・種崎・やや奥の池・十市・改田を含む前浜・夜須・手結和食などが当てられており、『土佐日記』に出てくる地名のうち、考証の最も厄介な個所の一つである。竹村氏はこの大湊について、第三章「研究史篇」・第四章「本論篇」の二章に分けて、詳しく検討を加えておられる。まず『土佐日記』地理関係の現存文献で最も古い桂井棠庵の「望大港詩文」（一七〇〇ごろ）の説を、雅澄の『地理弁』その他が「十市説」と見た誤認を修正して、それを「改田説」として「前浜説」に含ませ、『土佐幽考』の説も同じく「十市説」に入れられていたのを、正確には「池説」とすべきであることを論証されたのをはじめとし、従来の諸説を整理される。その結果、以上の多くの推定地の中で十市・前浜を除く大部分は、根拠も不明瞭であり、貫之らの航行の距離などについて穏やかでない点があって、結局野見嶺南『大港図記』（一七七四）・戸部愚山『大湊紀行』（一七七五）・雅澄『地理弁』以下、浜田

春水氏「土佐日記の大湊」に及ぶ前浜説と、吉村春峰『大港考証』（一八六七）が称え、服部精四郎「土佐日記大港に関する先輩の考証を評す」（一九〇一）、さらに最近の山本笹樹氏『十市村古事考』が支持する十市説との論争に帰着する。竹村氏は、貫之らの前泊地浦戸からの距離および次の泊地奈半までの距離と、想像されるかれらの一日の行程の速度とを勘案した、さらに細密な計算、『土佐日記』ではこの大湊へ国府周辺から贈物をもって見送りにくる者がいるが、その国府からの交通の便、また『土佐日記』一月八日の条に「今宵、月は海にぞ入る」とあるけれども、八日の月が直接海に入る場所は浦戸から奈半までどこにもなく、ただこういう感じをどの程度与えうるかという港の周囲の地勢、あわせて地質・地形学的、考古学的観察による、貫之時代に港の存在した条件などについて、両者を比較すると、十市より前浜の方が確率が高いと結論されている。

第五章「宇多の松原」。この場所がやはりはっきりしない。竹村氏は、禾麿『土佐幽考』・雅澄『地理弁』などの所説の他、『岸本村誌』に引用する徳永千規の『香美郡誌』（一八五〇ごろ）、同じく歳浦居南の「宇多松原記」（一八四七）といった特殊な残存資料を紹介しながら、現在も少しばかりやはり松の生えている岸本の香宗川の新水路の川口を中心に、岸本・赤岡、西は中松が瀬から東は月見山までの海岸に、往時の松並みを想定したり、現在の海岸からはやや奥になる富家の兎田（ウサイダ）まで当時の海は入り込んでいたかという仮定のもとに、その兎田の近辺を指すかと推論されたりしている模様を詳説、ただし岸本が陸地であったことは出土品などから明らかであり、したがって奥地説は成り立たないとされ、一方現在の兎田を古くウダと呼んだことはまちがいないので、貫之の眼に映ったのは、だいたい岸本～赤岡あたりの松原に当たるが、「大胆に想像を逞しくするのを許されるなら、『うたのまつばら』というほどちゃんとした呼称はなく、ただあの海岸のかなたに『うた（兎田）』というところがあったなと記憶をよび起こして、（宇多）上皇を追慕するあまり、この松原を宇多のまつばらという名で呼んだのではないか、といわれるのである。なお第六章「奈半」はとくに問題はなく、簡単に解説されている。

室津については、第七章に「『むろつのとまり』は室津か津呂か」、第八章に「一月十七日室津出航後引き返した泊りは、室津か、白浜か、津呂か」、第九章に「室津の泊りは室津のどこにあったか」の副題をそれぞれつけた三章をもって論じられている。『土佐日記』解釈上重要なのは、第七・八章の問題点である。『土佐日記』一月十一日の条に、奈半から出発して「室津を追ふ」とある「室津」を現在の津呂とする説が、雅澄の『地理弁』以来かなり有力に行わ

れ、寺石正路氏の『土佐名勝誌』(大正二)および『土佐史談』所掲「史蹟名勝・室戸岬」(昭和二)が同説を主張、しかしそれに対し、室津泊地はまさに現在の室津であるとする、関田駒吉・吉岡高吉・今村明恒・久保田博・山本武雄の諸氏の反論が、同じく『土佐史談』誌上その他に発表され、この「室津説」が『土佐日記』の専門家松村誠一氏や萩谷朴氏によって取り上げられ、最近では「津呂説」の影は薄くなってきた。竹村氏も「室津説」に同意される。それについて氏は、室津の古さと津呂の新しさを文献的に解明、また両港の開鑿の事情を解説し、雅澄の誤解が、一つには『地理弁』にも引くところの、津呂港の修築工事に尽力した野中兼山の築港記が「室津」に通ずる「室戸港記」と名づけられていることに起因すると論じられ、さらに推理を深めて、「津呂という歴史の浅い集落名」より「弘法大師以来用いられ、一種雄大なニュアンスをもつ『室戸』という名称」の方が、津呂築港の大事業にふさわしかったので、兼山はそのように名づけたのであろうと述べておられる点に注目される。次に、一月十七日、一旦港を出た貫之一行が強くなってきた海上の風のために引き返した場所はどこかという問題が、第八章に取り上げられている。それについて、久保田博氏が『室戸町誌』の中の「室津の泊に船繋りする人」および『土佐史談』所掲「土佐日記に於ける御崎の泊りについて」の論で提案された、室戸岬の東側「白浜説」、萩谷朴氏の「津呂説」(『土佐日記全注釈』)によらず、竹村氏はやはり「室津」へ戻ってきたと見ておられる。気象条件に関するできるだけ正確な検討、氏自身舟を仕立てて実験された結果、白浜の港としての機能の考察、景色の面での室津・津呂・白浜の比較、すなわち『土佐日記』に「この泊り、遠く見れども、近く見れども、いとおもしろし」と書いてあるのに、やや主観的だが、室津が一番かなっていると考えられることなどを根拠とし、「十八日、なほ同じところにあり」という『土佐日記』の記述に自然に従う読み方からも、室津へ戻ったとするのが最も適切であるとされるのである。第九章、および第二部の諸論、それぞれに興味ある問題を究明されているが、紙面の都合で省略させていただく。

さて、本書の特徴はまずその徹底した実証的研究にあるといえよう。本書の主題とするような考証は、事実の空白を埋める作業であるために、ままかえって恣意的な判断を客観的事実と考えたくなる誘惑に満ち満ちているにもかかわらず、竹村氏は論の飛躍を極度に抑え、きわめて冷静に着実に論証を進めておられるので、そのような危惧をまったく感じさせない。あるいは最終的な結論を保留することで問題の所在を明らかにし、またあるいは氏の到達された結論がほとんど動かしようのない客観性を示すという、いずれにしても意義深い成果を挙げておられるのである。もちろん『土佐日記』の

地理が対象であることはいうまでもないが、むしろ客観的一般的な地現的状況の十分な認識の上に立って、改めて『土佐日記』の地理的な内容を明確に理解しようとされているといってよい。たとえば、国府の所在地についての細かい査定、古代の浦戸湾の汀線の把握と貫之らの舟行に関する問題点の摘出、大湊を前浜と推定する上に、国府との交通の便のよさが主な要因の一つとされていることなど、如上の議論においても、そのような特色はよくうかがえよう。これは高知に永く住んでおられる氏の地理的感覚が基盤となって、『土佐日記』の旅を具体的に受容されているからである。次に、こうした氏の考証過程と無関係でないが、本書には近世から現代に至る土佐の研究者の業績が豊富に利用されている。それらを代表し、『土佐日記』の地理的な考説を綜合的に行なっている雅澄の『地理弁』などは、よく知られているけれども、そうした特例を除くと、ほとんど従来の『土佐日記』の注釈書や論著に取り上げられることのなかったものばかりである。その中には非常に優れた意見も数々歳されている。本書はそれらの研究を縦横に駆使しながら、つねに竹村氏の穏当で独自な見解を導き出しているが、そのことが同時にそれらの研究の紹介の役割を果たす。氏は本書の序文に、「この日記の地理的研究は、ほとんどが地元土佐の研究者」の手に成り、ただ「結論だけ」が「中央の学界に紹介」されて、「その説の当否を判断するには資料が不十分で」あったのを、「できるだけ詳細に」説明したと述べておられるが、そうした埋もれた研究が単に紹介されているだけでなく、本書によって『土佐日記』研究史の中に的確に位置づけられているといえる。なお序文には考古学・地学等の隣接諸学の助力のことに言及されている。この種の研究としてその効果は見落せない。

ところで、貫之らが一月十七日引き返した港を室津とするのに疑点の一つとして、同二十日の月が「山の端もなくて、海の中よりぞ出で来る」と書かれている情景が、岬の西海岸の室津では合わないのではないか、という問題がある。竹村氏はそれを機械的に思考されず、その時思い起こされた安倍仲麿の故事とも重ね合わせて、海からの月の出をむしろ心理的真実として捉え、「室津の地理的状況は、そのような感覚を起こさせる条件を持っていた」と説かれる。その「地理的状況」とは、もはや素朴な自然的状況ではなく、人間的な意味を孕んだ「地理的状況」である。『土佐日記』の文学としての固有な地理がここから始まる。まさに本書に実証された客観的な基盤の上に……。

（『土佐日記の地理的研究 ―土佐国篇―』昭和五二年四月三〇日
笠間書院　A5上製　口絵とも三五八ページ　八、〇〇〇円）

―明治大学教授―